



TITLE:

包括社會學概念批判

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 包括社會學概念批判. 經濟論叢 1929, 28(1): 21-53

ISSUE DATE:

1929-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129705>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷(十二第

行發日一月一年四和昭

新年特別號

營利の事業に屬せざる一時の所得 . . . 法學博士 神戸 正雄

包括社會學概念批判 . . . 文學博士 米田庄太郎

明治初年の大阪の新工業 . . . 經濟學士 黒正 巖

リカアドウの恐慌論 . . . 經濟學士 谷口 吉彦

豫算に依る企業の統制 . . . 經濟學士 大塚 一朗

交通事業の經營主體 . . . 經濟學博士 小島昌太郎

明治初年大阪の御用金 . . . 經濟學博士 本庄榮治郎

(禁 轉 載)

包括社會學概念批判

米田庄太郎

目次

- 一 ジュルケム社會學論一般
- 二 集團心理學概念問題
- 三 一般社會學概念問題

私は曩に形式社會學を以て社會學の全領域を占めるものと認め、且つかゝる社會學を一の特殊社會科學と見るジムメルの社會學概念が、彼の思想の最も圓熟せる晩年に至つて、如何に彼れ自身によりて改修され、そうして彼の社會學概念が結局、實質的には如何に私の社會學概念に一致又は接近して來たかを論述して、以て社會學の領域をあまりに狭く解する社會學概念が學問論上到底維持され難きものなるを論證したが、本節に於ては夫れと反對に、社會學の領域をあまりに廣く解する社會學概念も亦、ヤハリ學問論上維持され難きものなる所以を、特にジュルケムの社會學概念の批判によりて究明したいと思ふ。要するに私は社會學は私の云ふが如き意味にて一般社會科學として、且つ純正社會學、總合社會學及び組織社會學或は社會科學一般方法論の三部

門より成立するものとして考へられるに於て、始めて學問論上正當に建設され、一の科學として健實に、又吾人の學問的要求を正當に充足しつゝ、發達し得るものと確信して居るので、社會學を一般社會學よりもより狭きものと見る見解も、亦より廣きものと見る見解も、共に正當でないと思へるのである。(但し本論文は昨年引き續いて本雜誌上に公にせる拙稿「一般社會學の概念」の第五節に當るものである。)

然るに「一般社會學の概念」(一)の中に述べし如く、ゾウルケムは一般社會學をも社會學の一部門或は一分枝と見るほど廣大なる社會學概念を提唱したので、彼は専門の社會學者中恐くは最もも廣大なる社會學概念を立てた人であると思はれる。そうして彼を祖述するゾウルケム派或は佛蘭西社會學派と稱せられて居るものは、今日佛蘭西に於て甚大なる勢力を振ひ、同國で社會學と云へば一般にゾウルケム社會學を意味するものの如く解されて居る程であつて、ゾウルケム社會學概念は現今の社會學上重大なる意義を有するものである。それで私は此處に特にゾウルケムの社會學概念を批判して、以て社會學の領域をあまりに廣く解する社會學概念が、學問論上到底維持され難い所以を論證したいと思ふ。(但し私は本節に於ても、前節に於てジューメル（ゾウルケム）の社會學概念に就て企てし如く、ゾウルケムの社會學概念を彼の主要著作に就て順次に論評して行きたいのであるが、かくては本論文はあまりに長くなるから、只全體から見て一般的に批判するだけに止める。)

一　ゾウルケム社會學論一般

先づヅルケムの社會學論の一般を簡單に説述して置く。今ヅルケムは千八百八十五年から社會學上の論文を發表し始めて居るが、併し彼の社會學論の根本思想を始めて組織的に確立したのは、彼の社會學上の最初の大著作「社會的分業論」を公にせる頃、即ち千八百九十三年頃からであると思はれる。とにかく彼が社會學論の根本思想を組織的に論述したのは、千八百九十四年から千八百九十五年に亘りて「哲學評論」上で公にされ、且つ同年に小冊子として出版された「社會學的方法の諸規則」(本書はさきに松永榮氏によりて「ヅルケム社會學的方法の規準」と題して邦譯されたと聞いて居たが、昨更には川邊濤利氏によつて邦譯され、「ヅルケム社會學研究法」と題して、刀江書院から出版され)に於てある。併し本書以後の彼の著作を詳しく吟味して行くと、本書中に論述されて居る根本思想中重大なる修正を加へられたものあることが發見される。又其等の根本思想の或ものに就てはヅルケム派社會學者中解釋を異にする人々もある。尙ほ晩近には彼等の中にヅルケムの所謂「社會學主義」なるものを修正して、「新社會學主義」(Néo-sociologisme)とも稱せらる可きものを唱へ出せる人々もある。されば本書を以て或人々の如く「ヅルケム社會學の經典」と見んとするは、少なくとも今日では穩當でないと思ふが、併しヅルケム社會學の一般的案内書として、本書は社會學研究者の先づ一讀し置く可きものである。されど本書に於てはヅルケムは、彼の社會學の組織或は社會學の領域の區分、或は一切の社會科學の組織的分類に就ては明白に論述して居ない。かくて此の問題に關する彼の見解に就ては色々誤解が起つたのであるが、他

の著作に於ては彼は此の問題に就ても明白に論述して居る。殊に *De la méthode dans les sciences* 中に收められて居る彼の論文「社會學と社會科學」に於て、最とも簡明に且つ組織的に論述して居る。それでツルケム社會學論の全般を正當に理解する爲めには、吾人は「社會學的方法の規則」の外に、少なくとも右の論文を閱讀せねばならぬ。尙ほ左の諸論文を參考することが有益である。

Les études de science sociale ; *Revue Philosophique*, 1886. *Cours de science sociale* ; *Revue internationale de l'Enseignement*, 1888. *La sociologia ed il suo dominio scientifico* ; *Revista Italiana di Sociologia*, 1900. *De la méthode objective en sociologie* ; *Revue du synthèse historique*, 1901. *Sociologie et sciences sociales* ; *Revue Philosophique*, 1903. *On the relation of Sociology to the Social sciences and to Philosophy* ; *Sociological Papers*, 1903. *La sociologie* ; *La Science Française*, Tome I, 1915. -

今ツルケムの論ずる處によれば、社會學は先づ自然現象の一部類としての社會現象間に存立する一定不變の一般的關係、即ち自然法則を發見することを認識目標とする、一の實證科學である。次に社會學はかゝる實證科學として他の何れの實證科學にも依屬しない所の、即ち生物學にも更に心理學にさへも依屬しない所の、一の自立的或は自律的科學である。要するに社會學は社會現象の自然法則を探究する、一の自律的自然科學であると云ふのが、即ちツルケムの社會學論の根本思想である。そうして彼が社會學的方法の規則として詳しく論述して居ることは、つまり右の根本思想に基いて展開されたる思想である。それで此處では私は只右の根本思想を批判的

に考察するだけに止めたいと思ふ。

先づ彼は社會學を、社會現象の自然法則を探究する一の自然科學として、如何に確立せんとして居るか云ふに、彼は先づ社會學を、社會生活の目的設定や又其の實現手段を考究する學と見る見解を、極力排斥して居る。是れ彼の考へる處によれば、社會學をかゝる學問と見るに於ては、夫れは只主觀的意見を論述するだけのものに止まり、社會現象に關する客觀的な確實な科學的知識を收得することが出来ないからである。併し私は社會生活の目的設定や其の實現手段の考究を單に主觀的意見に止まるものと見る見解には、直ちに賛成することは出来ない。是れ社會生活の目的設定は社會哲學の主要問題として、又其の實現手段の考究は社會政策學の任務として、學問論上甚だ重大なる意義を有するものであるからである。實際にはジュールケム自身も此等の問題を非常に重要視して居るので、彼は實證科學としての社會學の研究が、此等の問題の解決に必要な知識を與へ得ないならば、自分は社會學に何等の興味をも有しないとまで言明して居るのである。否な彼は公式的には社會學は嚴密なる科學であると主張しながら、しかも夫れに基いて其等の哲學的及び政策學的問題を解決することにあまりに焦つたが爲めに、彼の社會學中にはあまりに多く社會哲學や社會政策學が混入され、そうして彼の社會學は純粹なる科學ではないものとなつて居るのである。要するに社會生活の目的設定や其の實現手段の考究は、ジュールケムの考

へる如く單に主觀的意見の陳述に止まらねばならぬが故に、社會學の問題となす可きものでないのではなく、其等の問題はツマリ社會哲學や社會政策學に屬す可きものにして、科學としての社會學は學問論上かゝる問題を取扱ふ可きものでないが故に、社會學はかゝる問題に觸れてはならないのである。

併し科學としての社會學は學問論上かゝる問題を取扱ふ可きものでないとするも、即ち社會學は哲學や實際學の一學科でないとするも、只それだけの理由によりて直ちに、社會學は社會現象の自然法則を探究する一の自然科學である可きものであると推斷することは許されない。是れさきにジムメルの説を批判する際に述べし如く、自然科學（此處では云ふまでもなく方法論的意味にて此の語を用ひて居るのである。）の外に科學の他の部類即ち私が了解科學と稱するが如きものが存立し得るからである。尙ほジュールケムの如くに、科學とは總て自然科學を意味するものにして、自然科學の外に科學は存立しないと云ふ傳來の見解を保持して、科學としての社會學は論理的に一の自然科學であらねばならぬと考へることも、社會現象間には自然法則が存立して居ないが故に、社會學は實際上自然科學として成立し得ないかも知れない。かくて此の際社會學は一の自然科學であること或はある可きことを論證する唯一の有力なる方法は、只何れかの自然法則が現實に社會現象間に存立して居ることを、證明することであらねばならない。然らばジュールケムは此の事を實際に證明して居るか云ふに、私

は決してそうでないと思ふ。彼は從來の社會學者の企だては總て失敗して居ると評して居るが、即ち從來社會學者が社會の法則として提唱せるものは、總て眞に社會の法則と認め得られるものでないとい評して居るが、併し彼自身が多年の研究の結果として提唱して居る社會の法則なるものも、從來の社會學者の提唱せるもの以上に客觀的に確實な、眞の法則であるとは、恐くは彼自身及び彼れに盲從する人々の外は、何人も承認しまいと思ふ。要するに彼は社會學を一の自然科學として建設せんとする彼の主觀的熱望を陳述して居るが、若しくは社會學は一の自然科學であらねばならぬと云ふ獨斷説を陳述して居るに過ぎないので、決して社會學を一の自然科學として學問論的に基礎附け或は確立して居るのではないのである。併し私はさきに述べし如く社會學は本來自然科學としてではなく、了解科學として學問論に確立さる可きもの、又確立し得られるものと考へて居るのであるから、之を自然科學として確立せんとするジュールケムの企だては、其他の多くの自然科學的社會學論者の企だてと同様に、當然失敗す可きものと考へて居る。隨ふて私には彼の社會學論の根本思想の此方面に就てはあまり興味を有せず、又重要視しない。それで此處では主として彼の社會學の根本思想の他の方面、即ち社會學は他の諸科學の何れにも依屬しない、殊に心理學にさへも依屬しない一の自立的或は自律的科學であるとする方面、并に社會學の組織即ち社會學の領域の區分に關する見解を、やゝ詳しく批判的に考察するに止めたいと思ふ。

先づジュールケムは如何なる意味にて社會學は一の自立的科學であると主張するかを簡單に叙述せんに、今ジュールケムが社會學界に乗り出した時代には、所謂生物學的社會學即ち社會學は生物學に依屬する科學であると見る方針は段々衰退し、そうして所謂心理學的社會學の方針が大に勢力を振ふて來て居たのであるから、彼は社會學の自律性を主張するに當つて、特に社會學が心理學から獨立す可きものなるを論證することに、専ら力を注いだのは當然であつた。かくて彼は先づ社會現象を心理學的に、詳しく云へば個人心理學に説明せんとする方針を詳しく批判して、極力之を排斥し、そうして社會的事實は社會的事實によりて説明さる可きもの、又正當に説明し得られるものにして、決して個人的或は個人心理的事實によりて説明さる可きものでない云ふ一原則を立てた。

(但しジュールケムは此の原則をコンソントの社會學的根本思想を發展させて立てたものの如く論じて居る。實際そうであるかも知れない。併し事實上此の思想は彼に先だちて既にグムプロヰクツ Gunplovitz によりて大に主張されて居たのである。されば此の思想の發達を研究するに當つては、吾人はグムプロヰクツにプリオリテを認めねばならぬ)

要するにジュールケムは社會的事實は決して個人心理的事實でなくして夫れから獨立する事實であり、隨ふて個人心理的に產出されたるものとして個人心理學的に説明さる可き又され得ないものでなく、社會的事實によりて產出されたものとして社會學的に説明さる可き、又され得るものであると主張したのである。

併し今社會的事實は個人的或は個人心理的事實でなく、或は之れに屬する事實でなく、夫れ自身獨立する事實であるとすれば、夫れは如何なる性質或は種類の事實である可きか。ジュールケム

は事實或は實在の根本的分類に就ては、物理的或は物的なるものと心理的或は心的なるものとに大別する通説を抱持して居たのであるから、社會的事實は物理的事實でないことを認めながら、しかも個人心理的事實でもないかと考へるに於ては、彼は必然的に心理的事實或は心理的なものを、個人心理なるものと然らざるに區別せねばならぬ。かくて彼は心理的なものを個人心理的なもの或は個人意識と、集團心理的なもの或は集團意識とに大別し、そうして物理的事實でなければ又個人心理的事實でもない社會的事實は、本來集團心理的事實或は集團的なものであらねばならぬと考へたのである。

然らば個人意識から區別され、夫れから獨立する實在であると云はれる集團意識なるものは、本來如何なるものであるか。ジュールケムの論する處によれば集團意識は決して一種の形而上學的實體ではなく、個人意識の外から或は上から之を強制し或は拘束することによりて、經驗上吾人に覺識される經驗的實在にして、そうして個人意識或は個人心理的なものは腦髓細胞の團結或は總合から產出されるが、しかも何れの腦髓とも異なる新しき實在であると同じ理によりて、個人意識の團結或は總合から產出されるが、しかも何れの個人意識とも異なる、且つ何れの個人意識よりも高等なる新しき實在である。ジュールケムは右に述べしが如き意味にて集團意識の獨立實在性を認め、隨ふて又社會現象の獨立性及び自律性を認めたのであるから、彼が社會學は心

理學から獨立する自律的科學であると云ふ意味は、つまり社會學は本來集團心理學であると云ふことに歸着するのである。

ジュールケムは以上述べしが如くに考へて、社會學の自律性を論證し、學問論的に基礎附けんとしたのであるが、然らば彼は社會學の領域を如何に決定し、又之を如何に區分せんとしたか。約言すれば社會學と社會科學との關係を如何に規定せんとしたか。彼は先づ社會學を直ちに一般社會學と同一視する説を大に排斥し（其の理由は後に詳しく述べて、且つ批判する）、そして社會學を以て「社會諸科學の全體」(le corpus des sciences sociales) 或は「社會諸科學の體系」(le système des sciences sociales) と見たのである。かくて社會學の領域は一切の社會科學を包括する甚だ廣大なるものとなるのであるが、然らば彼は之を如何に區分せんとしたのであるか、或は一切の社會科學を如何に分類せんとしたのであるか。彼は生物學の分類に準じて先づ社會科學を、社會形態學 *la morphologie sociale* と社會生理學 *la physiologie sociale* と一般社會學 *la sociologie générale* との三大部に區別してゐる。そして社會形態學とは社會の外部的方面或は集團生活の地盤或は社會の形態を研究するものにして、社會生理學とは集團生活其物或は社會生活の諸表現或は社會の諸機能を研究するもの、終りに一般社會學とは一切の特殊社會科學の一般的結論を總括し、社會的事實を抽象的に特質附けるものを究明する社會學の哲學的部門であると解して居る。次にジュールケムは社會

形態學を社會制度との關係に於て諸人民の地理的基礎を研究する社會科學と、人口の容積・密度及び分布等を研究する社會科學とに分ち、又社會生理學を宗教社會學、道德社會學、法律社會學、經濟社會學、言語社會學、藝術社會學等に別つて居る。

却說ゾールケムが社會學を一の自律的科學と見る學問論的理由の一般、及び社會學は直ちに一般社會學と同一視さる可きものでなく、之を包括する甚だ廣大なる科學にして、社會諸科學の全體又は體系と認めらる可きものであると云ふ意味の一般は、以上述べしが如きものであるが、是れより本論文の主旨から見て特に重要視す可き二つの點に就て、彼の見解を批判したいと思ふ。

二 集團心理學概念問題

ゾールケムの社會學論に就て此處に私の先づ論評したいと思ふのは、社會學は根本的には集團心理學であるとする彼の見解である。此の見解は一見すれば社會學の基本的部門たる純正社會學は、根本的には一般的社會心理學であるとする私の見解と一致するものの如くに思はれるが、實質的には大に異なつて居るものである。是れ第一には集團心理學或は社會心理學の本質、つまりは集團意識或は社會意識の本質に關するゾールケムの見解と私の見解との間に重大なる差異が存

する爲めであり、第二には社會學に於て集團心理學或は社會心理學（但し社會心理學と集團心理學とを區別せんとする説は、殊に伊太利の社會學者によりて一時盛んに唱へられたが、併し私はかゝる區別はあまりに人爲的或は細工的であつて、研究の實際に於て保持され難いものであるのみならず、論理的にもかゝる區別を立てんとするは穩當でなく、又其の必要はないと考へるのである。尙ほ私は Stollenberg の立つてゐる *Soziopsychologie* と *Psy.*）の占める地位に關しても、彼の見解と私の見解とは大に異つて居るからである。そうして私は先づ本項に於て、集團心理學及び集團意識の本質に關するヅルケムの見解を論評し、次に社會學に於て集團心理學の占むる地位に關する見解は、次項「一般社會學概念問題」中に含めて之を論評することとする。

前項中に述べし處によりて知られる如く、ヅルケムが集團心理學を以て個人心理學から獨立する自律的科學と見るは、つまり集團意識を以て個人意識の外に或は上に存立する獨立なる實在であるを見るが故である。かくてヅルケムの見解に於ては、集團心理學が自律的科學であるが爲めには、其の對象たる集團意識が個人意識の外に又は上に存立する獨立なる實在であることが、先づ證明されて居なければならない筈である。然らば彼は集團意識の獨立實在性を如何に證明せんとしたか。今此の問題に就てヅルケムの思想を詳しく吟味するに當つて、吾々は彼の實在性の概念が明確でないことを發見する。彼は時としては集團意識、詳しく云へば集團的表象或は感情或は慾望或は意志等は、個人意識を現實に支配して居ると云ふこと、即ち其の有効性或は効驗性（*Wirksamkeit*）を實在性と解して居る様である。そうして彼が集團意識の實在性とはかゝ

る意味のもの、即ち其の有効性或は効驗性を意味するものに止まるならば、何人も恐らくは異議を挿まないであらう。併し彼は集團意識の實在性を、かゝる意味のものと見るだけに止まつて居ないことは、彼の論述を見れば明白である。即ち彼は効驗性以上の意味を、集團意識の實在性に認めて居るので、つまり彼は生命的實在は化學的實在の團結或は總合から産出されるが、しかも之れと異なる新しき實在であり、又個人心理的實在は生命的實在の團結或は總合より産出されながら、しかも之れとは異なる新しき實在であると云ふと同じ意味にて、社會的實在或は集團心理的實在は個人心理的實在の團結或は總合から産出されながら、しかも之れと異なる新しき實在であるかを見るのである。それでかゝる意味にて、集團意識は果して一の獨立なる新しき實在であると認め得られるか、問題となるのである。

今集團意識を一の形而上學的實體と認めずして、しかもヅルケムの云ふが如き意味で獨立な實在であると見る見解に就ては、タールドは極力之れに反對し、又前節に述べし如く、ジムメルも社會心理學の本質を究明せんと企だてた論文の中に於て極力之を排斥した。更に今日の米國の社會學者及び社會心理學者の多數も之を排斥して居る。そうして其等の人々が論述して居る排斥の理由は夫れ夫れ注目する價值を有するが、私はジムメルの論述して居る理由は殊に重要な意義を有して居ると考へる。併し私は此處では私自身の見地から、特にヅルケムが自説の證明の論

據とするもの其物の批判によりて、彼の説の正當ならざるを論證して見たいと思ふ。

さきに述べし處によりて知られる如く、ゾエルクムが集團意識或は集團心理的なるものを以て、個人意識或は個人心理的なるものの外に又は上に存立する獨立な實在であると見る見解の基礎或は根柢となつて居るものは、つまりヴントによりて創造的總合の原理として、又イヅレによりて「^{アッソルツィオン}團結或は結合は創造である」として、公式化されて居ると同一の思想である。そうして特にゾエルクムの社會學に於て、此の根本思想の歴史的由來を探究すると、それはつまり一切の現象を其の最單純な要素に分析し、其等の要素の結合或は總合として之を説明せんとする近世自然科學の根本方針と、第十九世紀に入りてより個人主義的經濟學に反抗して勃興せる佛蘭西の社會主義的思想家が、一般に大に強調せる「團結は力である」と云ふ政策論的思想の理論的轉化と、更にブートルの實在不連續説との結合或は總合より成立せるものなることが觀破されると思ふ。併し此處では此の思想の歴史的由來を詳しく論述する餘白はないから、直ちに其の理論的價値の批判を試みることにするが、是れも甚だ複雑な問題であつて、到底詳しく論述することは出来なから、只簡單に二三要點を述べるだけに止める。

今ゾエルクムの右の根本思想に就て私の提出したいと思ふ問題は、彼の論する如く、集團意識は個人意識の團結或は總合によつて產出されるが、しかも化學的要素の結合或は總合より產出さ

れる化合物が、是等の元素と異なる新しき實在であると同じ意味に於て、個人意識とは異なる新しき實在であると見るに於ては、彼が毫も個人意識の作用に因らずして全く集團意識と集團意識との團結或は總合によりて産出されたと見る複合的集團意識も亦、ヤハリ單純なる集團意識とは異なる新しき實在であると認む可きかと云ふことである。ゾエルクムの論法を論理的に推し進めて行けば、吾人は當然複合集團意識を以て單純集團意識とは異なる新しき實在であると認めざるを得ないと思ふ。しかも彼は此の如くに論結せず、複合的集團意識も單純集團意識も共に同じ實在であると見て居る。何故であるか。是れつまり兩者は只複合の度合に於ける差異を有するだけで、性質に於ける差異を有しないが爲めであると思はれる。然らば複合集團意識と單純集團意識との間に存すると云はれる差異以上の差異、即ち複合の程度以外の性質上の差異が、單純集團意識と個人意識との間に存立すると考へ得られるか。そう考へ得られるのでなければ、ゾエルクムの見解は立て得られない筈である。然らば彼は單純集團意識と個人意識との間に如何なる性質上の差異の存するを證明して居るか云ふに、彼の論述を詮じ詰めると、つまり單純集團意識が生物現象及び物理現象に依存する度合は、個人意識が夫れに依存する度合よりも少くないと云ふことに歸着すると思はれる。そうして彼は集團意識が益々複合的に高等になるほど、生物現象及び物理現象から獨立する度合が増大し、遂には全く獨立するに至るものゝ如くに論じて

居る。併し彼は又一切の集團意識は、根本的には社會の容積即ち人口の數と、社會の密度即ち人口の集中の度合とに依存するものと論じ、一種の唯物主義説を主張するものゝ如くに解されて、種々なる非難を受けて居る。(近來ブーダレ氏やダグイ氏は此の點に就てジュールケムの眞意の辨明に大に勉めて居る。)併し此の問題はとにかくとして、生物現象及び物理現象に依存する程度の大小と云ふが如きものは、つまり只外部的條件の差異に過ぎないものにして、個人意識にありても亦集團意識にあつても、其の具體的顯現に關しては重要な意義を有するものであるが、しかも兩者の性質を根本的に區別するものでないと思ふ。要するに私は個人意識と集團意識とは同一の實在の二方面と見る可きものにして、性質の相異なる二種の實在と見る可きものでないと思へるのである。さきに述べし如くジムメルが社會の實在性に就て論述して居ることは、ジュールケムの説とは異なつて居るが、併し私は結局同様な批評を加へるのである。

更に私はジュールケムの論法に従ふて他の方面から推し詰めて行くと、彼の見解はヤハリ疑はしくなると思ふ。さきに述べし如く、彼は集團意識が個人意識を強制し或は拘束すると云ふことを以て、前者が後者より獨立する實在であると見る重要な一論據と認めるのであるが、併し此の事が總合的生産物は其の要素から獨立する新しき實在であると見られる重要な一論據である可くは、生命或は腦髓細胞が化學的元素から獨立する新しき實在、又個人意識が腦髓細胞から獨立

する新しき實在である爲めには、腦髓細胞は化學的要素を、又個人意識は腦髓細胞を夫れ夫れ強制し拘束するものであらねばならぬ。併し集團意識が個人意識を強制し拘束すると云はれると同じ意味にて、果して腦髓細胞は化學的要素を、又個人意識は腦髓細胞を強制し拘束すると云ひ得られるであらうか。かゝる立言は今日の自然科學的研究上決して許されないものであると思ふ。

否な化學的要素は其の一定の結合或は總合の仕方によりて腦髓細胞を制約し、腦髓細胞は其の一定の結合或は總合の仕方によりて個人意識を制約すると見られて居ることから考へて、寧ろ夫れ夫れ前者が後者を強制し拘束すると云はる可きである。されば集團意識が個人意識をジュールケムの云ふが如き意味にて強制し拘束すると云ふは、彼の考へとは正反對に、つまり集團意識とは、腦髓細胞が化學的要素から、又個人意識が腦髓細胞から異なれる新しき實在であると云はれるのとは異なりて、本來同一の實在の二方面であることを證明するものであると、見る可きであると思ふ。要するに私の考へによれば、集團意識と個人意識とは二つの本來相異なる實在ではなく、同一の實在の二方面であるが故に、兩者の間に甚だ密接なる關係が存在し、そうして夫れが爲めにジュールケムの考へるが如くに、前者は後者を強制し或は拘束するのであると見る可きである。

尙ほジュールケムが集團意識は個人意識を強制する理由として論述して居る思想を吟味すると、彼は集團意識は決して一の形而上學的實體を意味するものでないと繰り返して辨述して居るに拘

らず、彼の立場から論理的に推論して行くと、結局一の形而上學的實體と認めざるを得なくなると思ふ。然らば彼は如何なる理由によりて集團意識は個人意識を強制すると考へるか云ふに、彼が其の根本的理由と認めるものは、要するに集團意識は個人意識に於て表現或は實現されるものであるが、しかも如何なる個人意識も完全に之を表現或は實現することは出来ない、換言すれば如何なる個人意識も其の全體を所有することが出来ない、そうして集團意識は個人意識を無限に溢れ出て、或は超出して、之を包み、之を養ない、之を高めるもの、かくて個人意識に對して精神的權威を有するものであるといふことに歸着すると思ふ。此の點は彼の集團意識の觀念に於て、甚だ重要な意義を有するものと考へるから、左に少し詳しく説述して置く。

ジュールケムは集團意識と平均意識とを混同することが、從來社會學者をして集團意識の本質、隨ふて社會の本質を、正當に理解するを得ざらしめた根本的理由であるとして、兩者を嚴格に區別する必要を強調し、且つ兩者を嚴格に區別することが、彼の一大創見であるが如くに論じて居る。そうして彼の論ずる處によれば、一の現象が一の社會に一般的であるが故に、集團的であるのでなく、集團的であるが故に、即ち大なり小なり義務的であるが故に、一般的であるのである。換言すれば夫れは社會の衆個人に己を押しつけるが故に、社會の一狀態であるのである。又夫れは全體の中に存するが故に、諸部分の中に存するので、諸部分の中に存するが故に全體の中

に存するのではない。かくて集團意識は個人意識の平均よりもより大なるもの、又之れと異なるものである。そうしてヴェルクムは倫理的なるものに就て、右の區別は先づ最も明白に理解されると考へ、倫理的なるものに就て右の區別を説明して居るが、其の説く處によると、倫理的なるもの其物は、平均人が之れに就て有する概念と決して混同さる可きものでない。此の概念は凡庸なる平均行爲に於て表現されるものにして、そうして個人は一般にかゝる凡庸性を有するものであるから、若し倫理的なるものは個人の平均を表現するものに外ならないとすれば、夫れが現實に見られる如く個人を超越する理由は到底理解されない。奇蹟によらずばより大なるものが、より小なるものから産出されることはない。若し集團意識が最も一般的な意識に外ならないならば、夫れは決して平凡或は凡庸の水準以上に上り得る理由はない。かくて社會が兒童に注入せんと努力し、又總ての成員に尊敬を強いる處の、かの高尙な又明かに命令的な倫理的訓言は何處より來るかは、到底理解されない。要するに一般的なるものは本來完全に各個人の具有する處のものであるが、之れに反して集團的なるものは、各個人は疑ひもなく之を分有して居るが、しかも只其の僅かな部分しか分有して居ない一の家督或は世襲財産である。一般的なるものは只一の反映に過ぎないものであるが、集團的なるものは眞に一の理想であるのである。夫れは現實的にして同時に超越的なるものである。夫れは平均個人に對して模範として作用する理想の總體を包

含するもの、約言すれば集團的なものは即ち理想的なるものであるのである。かくて吾人は集團的なものに對しては、恰かもプラトンの理性が理念に對すると同様な態度をとつてゐるので、吾人は集團的なもの即ち理想的なるものにまで上り行き、之れと進歩的に己れと同化せんと努力するのである。

以上述べし處によりて見れば、ジュールケムは要するに集團的なものは即ち理想的なるものにして、かくて個人意識を無限に溢れ出で或は超越して、しかも之を包み、之を養ひ、之を高めるもの、かくて個人意識に命令する精神的權威を有するものであるが故に、個人意識を強制するものであると見るのである。今集團意識が個人意識を強制する理由を説明する爲めに、ジュールケムが集團意識の本質に就て論述せる右の思想は、結局彼は彼の集團意識をプラトンの理念に比して居ることによりても明かに察知せられる如く、純科學的なものでなくして大に哲學的形而上學的なものである。そうして之を集團意識の哲學的考究として見れば大に興味あるものにして、殊にラスクがプラトンの理念に下せるが如き解釋に従ひ、之れと比較して考察すれば、ジュールケムの右の集團意識説は彼自身の考へたよりも以上の形而上學的意義を有すると思はれる (Lask, Platon. Gesammelte Schriften, III. Band.) 併しジュールケムは集團意識を對象とする集團心理學或は社會學は一の哲學的學科でなくして、一の經驗科學或は自然科學であると見るのであるから、集團心理

學は集團意識を純科學的に研究す可きものにして、決して哲學的思辨を混交してはならない。隨ふて集團心理學に於ては集團意識の強制力も純科學的に究明さる可きものにして、哲學的形而上學的に解釋され辨護さる可きものでない。さればゾールケムは上述の如き集團意識論によりて、彼が強調せる科學としての集團心理學或は社會學の概念を、彼白から破壊して居ると云はねばならぬ。そうして其の結果彼の集團心理學或は社會學は、現實にあるがまゝの集團意識を科學的に説明するもの、或は了解するものではなくして、之を偏局的に解釋し評價するものとなつて仕舞ふて居る。此處に簡單に其の點を明かにして置きたいと思ふ。

今ゾールケムの考へる如く、集團意識は個人意識を包む無限に廣大なるものにして、之を養ひ、之を高めるもの、そうして個人意識は集團意識に對して、プラトンの理性が理念に對すると同様な態度をとりて、之れにまで上り行き、己れを之れと進歩的に同化せんとするものであると解するに於ては、夫れはつまり現實に經驗される集團意識を、只其の作用の一方面のみから見て偏局的に理想化し、一の形而上學的實體に作り上げたるもの（西南獨逸派の如き價值哲學の立場をとらざる以上）に外ならないと云はねばならぬ。是れ現實なる集團意識は、決してゾールケムの考へるが如く、只個人意識を引き上げる作用をなすだけに止まるものでなく、又之を引き下げる作用をもなすものであるからである。殊に一時伊太利及び佛蘭西の社會學者が大に熱中せる群集心理の研究の結果に徴すれ

ば、少なくとも群集に於ける集團意識は一般的には個人意識を引き下げるものであると云ひ得られる。ジムメルも同様な説を立て、居る。併し私はゾールケムが群集的集團意識に就ても、只夫れが個人意識を引き上げる作用の方面のみに着目して立説したのは偏見であると考へると同様に、多くの群集心理學者の如くに主として夫れが個人意識を引き下げる作用の方面に注目して立説するのもヤハリ偏見であると考へる。要するに私の見る處によれば、集團意識は其の働く事情或は條件の如何によつて、或は引き上げる作用をなし、或は引き下げる作用をなすものにして、兩作用の何れかを以て其の唯一の又は本質的な作用であると認む可きものでなく、隨ふて兩作用の何れかに即して、其の本質を規定せんとするは謬見である。尙ほ此處に注意す可き一の事實が発見される。夫れは集團意識の作用に就て、其の引き下げる方面を特に重要視する社會學者心理學者は、一般に生物學的見地をとつて居るが、之れに反して其の引き上げる方面を重要視する人々は一般に哲學的形而上學の見地をとつて居ると思はれることである。ゾールケムは常に公式的には、社會學は一の實證科學であると云ふ見解を固持して居たが、併し實質的には、殊に社會學によりて現代の哲學を改造せんとする大望を明かに意識せる以後は、大に哲學的考察を混入して來たので、彼の社會學を研究する人々は、此の點に注意することが肝要であると思ふ。

終りに集團意識の產出或は成立に就ても、亦其の變動及び發達に就ても、個人意識が之れに及

ばす作用或は影響を全く認めず、集團意識或は集團心理的なるものは、全く夫れ自身によりて成立し、又夫れ自身間の關係によりて變動し發達すると見るゾウルケムの見解、即ち彼の所謂社會學主義なるものの根本思想に就て簡單に批判を加へたいと思ふ。此の思想はゾウルケム社會學の根本的特徴であつて、そうして從來佛國の若き社會學者を魅して來たものであるが、それはつまり科學の名の下で一種の神秘主義を説くものであつて、近來勃興し來れる神秘主義的傾向に投合せるが爲めであるまいかと思れる。要するにゾウルケムは集團心理的なるものは個人意識によりて產出されるものでなくして、個人意識の團結或は總合の一定の仕方によりて產出されるものであり、又其の變動發達も毫も個人意識の作用や影響を受けず、全く集團心理的なるもの夫れ自身の團結或は總合の一定の仕方によりて行はれるものであると論じて居るが、併し其等の仕方其物は如何なるものであるかは全く説明して居ないので、かくて其等の仕方は一種の神秘的なものとなつて居る。されど私の見る處によれば、科學としての社會學は決してかゝる神秘主義を以て満足す可きものでなく、又かゝる神秘主義的解釋を以て止まる可きものでない。そうして其等の團結或は總合の仕方其物の詳しき究明を以て最も根本的な一問題として取扱ふ可きものである。然るに今其等の仕方其物を詳しく分析せんとすれば、それはつまり個人意識と個人意識或は心と心との一定の作用及び關係、即ち私の唱へるが如き意味の心と心との相互作用及び相互關係に外

ならぬことが覺られるのである。要するに科學としての社會學は決して集團意識は個人意識の團結或は總合の一定の仕方によりて産出され、又夫れ自身の團結或は總合の一定の仕方によりて變動し發達すると云ふが如き漠然たる言述を以て満足す可きものでなく、集團意識は心と心との相互作用及び相互關係によりて産出され又は實現されるものとして、其の相互作用及び相互關係を詳しく分析し究明す可きものである。然らざれば科學としての社會學は、其の最も根本的な一問題を全く無視して居ると非難されねばならぬ。そうして私の如く集團意識は個人意識の相互作用及び相互關係によりて産出され又は實現され、且つ變動し發達すると見るに於ては、集團意識は決して單に個人意識の作用にのみ依存するものでなくして、個人意識と個人意識との團結或は總合を地盤とするが、しかも個人意識其物の作用が如何に重大なる意義を有するものであるか、了解されるのである。

ジュールケムの所論を詳しく吟味すると、彼は實際に於ては種々の場合に個人意識の作用を認めて居ると思はれるに拘らず、公式的には常に集團意識の成立、發動及び發達は個人意識の作用から獨立して行はれるものと言明して居る。併しかゝる見解は上に述べしが如く、一種の形而上學的神秘主義としてはとにかく、科學としての社會學に於ては到底維持され難きものである。されば近來ジュールケム派の社會學者中にも其の理を理解して來たと思はれる人々が現はれて居るの

で、其等の人々は集團意識の成立變動及び發達に於ける個人意識の作用の重要を認め、かくてツェルケムの社會學主義を修正して、新社會主義とも稱す可きものを唱へ出して居るのである。

（此處に新社會學主義の發達に就ては最早論述する紙面がなくなつたから、他の論文に於て別に論述することとする。尙ほツェルケムが集團的なるものは理想的なものであり、理想的なるものは集團的なるものであると見る見解中に含まれる重大なる一問題、即ち社會的なものと精神的なるもの（物的なるものと及び心的なるものから區別されたる實在の一種としての精神的なるもの）との關係は、私は今日の社會學上最も重大なる一問題であると考えて居るので、此處にツェルケムの説を批判しつつ、自説の一般方針を述べる積りであつたが、本節は本號一回で完結した）と思ふから、之れも省いて別に他の論文で論述することとする。）

三 一般社會學概念問題

集團心理學概念問題に就て比較的に多くの紙數を費やせるが爲め、一般社會學概念問題に就ては極簡單に論述するだけに止めざるを得ないが、さきに少しく述べし如く、ツェルケムは社會學を直ちに一般社會學と同一視する見解を大に排斥し、そうして大體上私が總合社會學と稱する意味に於ても、亦純正社會學と稱する意味に於ても、一般社會學を以て社會學の全體と見るに於ては、社會學は遠い將來に於て成立する一科學として認め得られるだけに止まり、今日現存する一科學として到底建設され得ない理由を詳しく論述して居る。要するに彼の論ずる處によれば、社會現象全體に關する一般的知識は、只部分に關する詳細なる知識が先づ獲得されたる後に、始めて確實に獲得されるものにして、始めから確實なる一般的知識を獲得せんとするは到底不可能で

ある。是れ今日まで社會學を直ちに一般社會學と同一視する社會學者が、總て失敗したる所以である。されば今日現實に存立する科學として社會學を建設せんとするに於ては、吾人は先づ諸般の社會現象の夫れ夫れの特殊的研究に専ら力を注がねばならぬ。

右のゾルケムの見解は、確かに一方面から見れば正當である。併し他の方面から見れば、彼の見解とは正反對に、確實なる全體の知識が獲得されなければ、確實なる部分の知識は到底獲得されるものでないと言ふことが出来るのである。要するに科學的に見れば、全體は部分を離れて存立せざれば、又部分は全體を離れて存立しないので、兩者は相互關係に於て存立するものであるから、絶對的に確實なる知識ではなく相對的に確實なる知識を認識目標とする科學にありては、全體の知識と部分の知識とは相互的影響の下に、相伴なふて其の獲得する知識の相對的確實性を増進し、相携へて發達し行くものである。そうして此の事は實際上ゾルケム自身の社會學に就て最も明白に證明されて居ると思はれる。宗教、道德、法律及び其の他種々の社會制度の夫れ夫れに關する彼の部分的特殊なる社會學的研究は、如何にして實行され、其等の特殊的部分的社會現象に關する彼の部分的特殊の知識は如何にして獲得されて居るかと言ふに、それはつまり彼の集團意識論と云ふ一般的根本的な社會學的知識に基いて實行され、又之を前提して獲得されて居るのであるが、更に彼はかゝる部分的特殊的研究に基づき、又之れにより獲得せる部

分的特殊知識によりて、益々彼の集團意識論を確實にし且つ詳しく發展させて居るのである。表面上から見るとジュールケムはさきに述べし如く一般社會學を大體上私が總合社會學と稱するものの意味にのみ解して、之を彼の社會學の三大部門の最後の哲學的部門として居るのであるが、併し嚴密に吟味して行くと彼は彼の社會形態學及び社會生理學と稱する二大部門の根抵或は基礎に、更に私が純正社會學と稱するものと大體上一致するものに、形而上學的思想を混入せる別な一般社會學を暗に立てゝ居ることが發見される。夫れは即ち彼の集團意識論である。されば彼は公式的には、一般社會學を總合社會學と大體上同一視して、社會現象の部分的特殊な社會學的研究が大に發達したる後、始めて建設し得られる未來の一科學として、彼の社會學の最後の部門と認めて居るに拘らず、實際に於ては大體上純正社會學と認めらる可き意味での一般社會學を、一切の部分的特殊的研究の一般的基礎として大に重要視して居るので、更に彼の部分的特殊なる諸研究はつまりは其の一般的基礎を確立する手段であるとも云ひ得られるので、要するに彼は實際上純正社會學の意味での一般社會學を、現實なる社會學として建設せんと努力して居たと云はねばならないのである。

今ジュールケムの集團意識論は、私の云ふ純正社會學の如きものとして彼の社會學の基礎をなすものであると解するに就いて、ジュールケム派の社會學者デア (Marcel Déat) の近著中に注意すべ

きものが見出される。それはジュールケムが一般社會學を主として總合社會學の意味に解して、さきに述べし如く彼の社會學の三大部門の第三の最後の部門と見做して居たのに反して、デアは一般社會學を方法及び全般の或は總體の諸問題を研究するものと解し、更に是を二方面に分ち、其の一方面を社會學の第一の或は最初の部門と認め、そうして他の方面を最後の部門と認めて居るところである。(Marcel Déat, Sociologie, 1925.)

ジュールケム——(1)社會形態學、(2)社會生理學、(3)一般社會學、

デア——(1)一般社會學、(2)社會形態學、(3)社會生理學、(4)一般社會學、

然らばデアが先づ社會學の第一部門と認める一般社會學なるものは如何なるものであるかと云ふに、夫れはつまり社會學の起源及び發達、社會學の對象としての社會的實在即ち集團意識の一般的特質及び本質、並に研究方法等を論究するものにして、大體上私が組織社會學と稱するものと及び純正社會學と稱するものを粗雑に一まどめにせるものに當るのである。併し學問論的に嚴密に論じ詰めて行けば、其等の諸問題は結局組織社會學及び純正社會學として組織さる可べものであると思はれる。かくてデアはジュールケムの廣大なる包括社會學概念中に陰然含蓄されて居た一般社會學としての組織社會學或は社會科學一般方法論及び純正社會學を粗雑ながら、總合社會學としての一般社會學から區別し、且つ社會學の基本的部門として定立するに至つたことが推察さ

れる。要するに私の見解から見て、デアの社會學概念を分析すると、彼の云ふ社會學は左の諸部門に大別されることになる。

(1) 一般社會學——組織社會學及び純正社會學、

(2) 一切の特殊社會科學——彼が社會形態學及び社會生理學と稱するものに屬する諸科學即ち特殊社會科學、

(3) 一般社會學——總合社會學及び社會哲學、

かくて、ジュールケム及び彼の學派の云ふ社會學なるものは、つまり二種の一般社會學と其の間に插まれる一切の特殊社會科學とを總て包括するものとなる。併し社會學の概念をかゝる廣大なるものと解するに於ては、社會學はつまり一切の社會科學を包括する一の新總名に過ぎないものにして、一の獨立なる科學としては學問論上到底認め得られないものとなると思はれるが、ジュールケムはかゝる批評に對して左の如く辨明した。

「社會學と云ふ語は新しき諸觀念を總括し含蓄するものである。即ち社會的事實は相互に連帶的なものであると云ふこと、及び殊に社會的事實は必然的法則に従ふ自然現象として取扱はれねばならぬと云ふこと等を意味するものである。されば諸般の社會科學は社會學の特殊的諸分枝であらねばならぬと云ふことは、つまり其等の諸科學は夫れ自身實證科學であらねばなら

ぬと云ふこと、即ち自己の自律性を失なふことなくして、他の自然諸科學を支配する其の精神を受け入れ、他の自然諸科學に於て用ひられて居る其の方法を用ゆ可く、常に努力せねばならぬと云ふことを意味するのである。然るに諸般の社會科學は元來自然科學の埒外に生まれたるものにして、それが爲めに社會學的觀念の出現するまでは、全く自然科學の影響を受けて居なかつたのである。されば今諸般の社會科學を社會學の中に包括し整頓せんとすることは、之れに單に新し總名を附加すると云ふだけに止まるものでなく、更に其等の科學が新しき方向に進まねばならぬと云ふことを明かに表示するのである。要するに社會學は、コントが一般的に社會界に適用した其の自然法則の觀念を、更に詳細なる社會的事實にまでも浸徹させ、之を一切の特殊的社會諸科學に完全に移植せねばならぬ。然るに自然法則の觀念は以前には其等の社會科學に缺けて居たものであるから、今社會學が右の如き目的を成就せんとすることは、實に一切の社會科學を根本的に改造し、全く更生させるものなるを意味するのである。そうして是れ余輩が社會學者の目下の急務と確信する處のものである。又余輩は右の如くに進み行くことは、即ちコント及びスペンサーの事業を繼承し大成し行く眞の途であると確信する。是れ右の如くに進み行くことによりて、吾人は彼等の根本原理を保持して、しかも之を只彼等のなせる如くに、勝手に選り出せる社會現象の特定の部類にのみ適用するに止まらず、社會生活の全體

に適用するのであるから、かくて其等の原理の眞價を充分に發揮することが出来るが故である。 La Sociologie, dans La Science Française, Tome I, 1915.

右のツェルクムの語によりて、吾人は彼が社會學を他の一切の社會科學から區別される一の科學とは認めず、一切の社會科學を總括する科學であると見る理由は如何なるものであるかを、明白に了解することが出来ると思ふ。要するに彼は社會學と云ふ語は其の歴史上先づ第一に社會現象の研究に於ける一定の共同的精神及び方法、或は研究の精神及び方法の一定の統一を意味するもの、つまり一切の社會現象は自然法則によりて支配される自然現象の一部類にして、そうして夫れは他の自然現象の研究に於けると同一の精神及び方法によりて、即ち方法論的に自然科學と稱せられる科學部類の精神及び方法に従ふて、研究さる可きものなるを意味するものであるから、一切の社會科學を社會學の概念に於て總括し整頓すると云ふことは、つまり一切の社會科學は自然科學として建設さる可きものなるを主張して、從來の社會科學の方針を根本的に改造せんとすることを意味するものにして、社會科學の發達上甚だ重大なる意義を有するものと考へたのである。私はさきに述べし如くに社會科學を自然科學と見るは正當でないと考へるのであるが、併し社會科學の歴史上から見て、之を全然自然科學として建設せんとする方針の發達せることは、重要な意義を有するものなるを承認する。しかもかゝる方針を直ちに社會學と稱し、且つかゝる

方針に於て社會現象を研究する總ての科學を直ちに社會學と稱するは、さきに述べしが如くにジムメルの立てた、一の方法としての社會學と、一の科學としての社會學との區別を、混同するものであると云はねばならぬ。社會學の概念は歴史的にはジュールケムの云ふが如き意味を有つて發生したとするも、學問論的に一の科學として考察される場合には、決して其の歴史的意味に拘束さる可きでない。そうして嚴密に學問論的に考察する場合には、一切の社會現象を部分的特殊的に研究するものも、亦全體的一般的に研究するものも、總てを包括するものと云ふが如き意味にて、社會學を一の科學として建設せんとするは到底許され難き企だてである。是れかゝる企だては到底成就され難きものであるからである。ジュールケムの立てたるが如き包括的社會學概念は、只彼が之を唱へ出した時代の社會科學界の状態から考へて、歴史的に或意義を認めらる可きものであるに止まるので、學問論上から見て決して承認さる可きものでない。そうしてジュールケムの社會學概念中に含まれて居る一般社會學の如きもの、更にデアなどによりて稍々詳しく展開されたるが如きものを、尙は一層詳しく展開し、且つ學問論的に精練して、私が社會科學一般方法論、純正社會學及び總合社會學と稱するが如き三部門から成立する一般社會科學として、此處に社會學は始めて正當に一の獨立なる科學として建設し得られるのである。さきに述べし如く形式社會學を社會學の全體と見るが如き、あまりに狭き社會學概念を唱へ出したジムメルは、晩年其

の思想が大に圓熟するに至つて、形式社會學を以て單に社會學の一部門と認め、其の外に總合社會學の部門も亦社會科學一般方法論の部門も承認せねばならなくなつたのであるが、ゾールケム及び彼を祖述する今日のゾールケム派の社會學者の如く、一般社會學の外に一切の特殊社會科學をも包括するあまりに廣大なる社會學概念を唱へる人々は、其の研究が益々進歩するにつれて、自から其の社會學概念を學問論的に嚴密に反省する時期に達したならば、ジムメルとは反對に其の社會學概念を大に縮少して以て私の主張するが如き社會學概念に達着するであらうと思はれる。そうして此の事はデアの如く、既にゾールケムの一般社會學の概念に重要な修正を加へんとする人の現はれて居ることによりて推察されるところ。